

本書は、モデル・役者等で活躍する21歳の若者が、紆余曲折を経ながらも自らの障害と向き合ってきた記録である。

英国人の父親と日本人の母親の間に生まれた著者は、8歳の時、ニューヨークでADD（注意欠陥障害）と認定された。

文科省の12年度の推計で日本の小中学生の約6・5%にみられるという発達障害は、早期に気づき、環境を整え、正しく対処することが大切だという。

本書では、著者とともに障害と向き合ってきた母親の子育て観や教育観、母子と継続して密度濃くかわってきた主治医の見解、支援教育分野における日米の対応や教育の仕組みの違い等について詳解されている。

発達障害と言っても、その特性は個々様々である。著者には精神遅滞はないものの、感覚過敏でこだわりが強く、記憶力等に障害がみられ、顕著な学習障

発達障害の僕が輝ける場所をみつけられた理由



栗原 類 著
1296円 KADOKAWA
03-3262-0371

害があった。一人ですべてをこなしてきた母親は、多忙な中でも心からわが子を愛し、米国で、日本で、自立へ向けた取り組みを重ね、教室で言葉の暴力の「サンドバック」状態にあった息子を守り、励ましてきた。日本の道徳的価値観ではよく、「他人の立場に立つて考えなさい」といわれるが、他の者の気持ちを推し量ることが困難な障害のある著者は、他人の立場に立ちようがない。母親は表現を変え「自分がやられたら嫌なことは他人には絶対にしないように」と、繰り返し諭した。なるほどと思う。家族や教師は、わが子、わが教え子の特性をどのように受け止め、どのように対処すべきなのだろう。一言一句受け止めた貴重な情報満載の1冊である。

（元川崎市中学校校長・青木幸夫）



次期学習指導要領の改訂では、英語教育について「語彙や文法等は実際のコミュニケーションにおいて活用され、学習者が思考・判断・表現したりすることを繰り返すことを通じて獲得する必要があること」が掲げられている。ここに主眼を置いて理論的外観を示した後に、具体的な授業実践指導について書かれているのが本書である。

例えば、何かを紹介する表現として「言語形式ではなく、実生活との繋がりと英語が生活で用いられる」として、「This is a pear」を一例に挙げ、単に意味だけでは「死んだ英語」であるのに対して、日本の梨しか知らない人に、西洋梨を紹介する時などでは「生きた英語」になることが語られている。一方、CLILについては言語学習と言語使用を分けて考えるのではなく、両者を四つのCである言語、内容、思考、協学を統合して教えることを試み、学習者の

フォーカス・オン・フォームとCLILの英語授業 生徒の主体性を伸ばす授業の提案



和泉伸一 著
2916円 アルク選書
03-3556-5501

多重知能や多彩な才能を最大限に生かして生きた言語素材をできるだけ生きた形で用いることを提唱している。そして、フォーカス・オン・フォームとCLILの考え方が実際の英語の授業の中でどのように生かされるかについて、具体的な活動や授業案が提案されている。さらに、章末のコラムも興味深い。第2言語習得や英語教育の論文が、一般の方にも読みやすい形で紹介されている。例えば「ネイティブと学習者同士の会話、どちらが効果的か？」では、Sato & Lyster (2007) の研究を紹介し、言語習得においては「いつもネイティブがベスとは限らない。それぞれの良さを生かしながら言語習得を進めていくこと」を主張している。また、最終章（8章）では、今後の英語教育の向かうべき方向性を確認している。

英語教育の専門家だけではなく、一般的な読者も対象としていることから、専門的な知識を楽しく身につけることができる1冊である。

（愛知教育大学教授・高橋美由紀）